

40周年記念事業 理事長と青年部によるディスカッション

「葬祭業のこれからの展望について」

2021年10月20日

進行役：宮城県葬祭業協同組合

理事長 菅原 裕典

出席者：日下 利治・吉田 明昇

高橋建隆朗・刈谷 文俊

飯坂 淳・太田 浩士

片平 皓也・渡辺 健太



株式会社清月記／菅原 裕典

菅原：今日は、宮城県葬祭業協同組合の40周年の記念事業の一環として、青年部の方々と理事長が勉強を踏まえ、将来の葬祭業についてディスカッションをおこないたいと思います。

はじめに自己紹介をお願いします。葬祭業での経験年数、仕事を始めてからの変化や状況認識ということについても順番にお話下さい。そして最後は10年後、20年後への展望などもお聞かせ下さい。それでは青年部長の日下さんのほうからお願い致します。

日下：株式会社くさかや・常務取締役の日下利治と申します。私がこの業界に入ったのは25歳の時ですから、従事しておおよそ20年になります、私が入ったばかりの頃はまだ会館がほぼ無い状態でしたので、会館の導入や運用をいろいろ考えてやっていたという時期もありましたが、基本的には自宅やお寺での葬式が大半でした。そのうちに会館が増えていって、会館施行の割合が増加し、今ではもうほぼ9割というような状態です。あらためて葬儀様式の変化を実感しています。



株式会社くさかや／日下 利治

吉田：気仙沼にございます、株式会社舟屋葬祭代表取締役社長 吉田でございます。コロナ以前に、10年前の震東日本大震災で災によって葬儀業界は大きく変化したと感じております。

しかし、見方を変えれば、震災にしても、今回のコロナにしても、ガラッと変わったというよりも実は少しずつ色々な変化はしていて、それが大きく露呈するタイミングが10年周期で発生しただけなのかな、とも考えております。



株式会社舟屋葬祭／吉田 明昇



株式会社たかはし葬儀社／高橋 建隆朗

高橋：名取市、元は閑上のたかはし葬儀社の代表取締役をしております高橋建隆朗です。よろしくお願ひします。葬祭業に従事するようになってから20年ぐらいになります。

ご存じの通り、名取市の港町ですので、当時は会葬者が多く、田舎のほうに行くと行列などもありました。当社の地域においては会館の普及は遅く、震災後から本格化したといえます。

先ほど日下さんからお話がありましたように、99パーセントが会館での葬儀になりました。

当時と今で違うことを言われは、やはり多様性ではないかなと思います。

刈谷：亘理町の刈谷と申します。私は葬儀の業界に入って21年ですが、ごんきやさんで2年間修行しまして、その時ちょうど会館を建設しました。亘理町のほぼ郡部ということで昔は非常に地域の色も濃く、会葬者が300人から500人くらいの規模が当たり前で、行列も組んでやっておりました。それから徐々に会館葬に移行して、現在は100%に近い状況です。今は本当に家族葬が多くて、隣近所にも教えなくていい、親戚でも遠い人は来なくていい、そうした風潮が加速度的に進んでおります。



株式会社刈谷葬儀社／刈谷 文俊

40周年記念事業 理事長と青年部によるディスカッション

「葬祭業のこれからの展望について」

飯坂：仙台葬祭の飯坂です。私は今45歳で、葬儀業界での経験は18年です。父が、引退しようかなと言い出した時に、その当時の社員だった番頭さんが辞めるという話も聞いて、だったら私にやらせてくれるということで家業を継いでおります。年齢的には吉田さん、日下さんと同年代ですから、業界で過ごしてきた時代も同じです。祖父、そして父の考えで会館は建てないという選択肢を採りました。それぞれの考えがあったと思いますが、私としては正直、小規模な会館を持ちたいと思っていたものの、踏ん切りが付きませんでした。



仙台葬祭株式会社飯坂屋／飯坂 淳



有限会社やまと屋／渡辺 健太

渡辺：亘理町で葬祭業をしております。私が2代目で、代表となって5年目になります。最初に研修として2年間清月記さんにお世話になりました。仕事を始めて最初に感じたのは、思ったよりずっと派手な業界だなということです。そんなときに震災があって、そのショックで派手さがだんだんなくなってきたなというふうにも思っています。その分お客様一人一人により寄り添い、しっかり向き合うということが求められるようになってきているのではないかと考えています。

太田：石巻葬儀社の太田浩士と申します。役職は取締役管理本部長です。私は葬祭業に従事したのが石巻葬儀社に入社してからになりますので、約18年になります。

その当時は弊社にも会館はあったのですが、自宅でお通夜、お寺で葬儀というのが半分ほどでした。ですから、仕事の内容としては、どちらかというサービス業よりは職人的な仕事だったかなと思います。ご親族や地域の方のお手伝いも多く有り、担当者としては負担が今よりも少なく、一人でもお通夜や葬儀をしてということが可能な時代でもあったかと思っています。



株式会社石巻葬儀社／太田 浩士



株式会社八善堂／片平 皓也

片平:八善堂の片平と申します、よろしく申し上げます。葬儀業界に入ったのは4年ほど前です。大学を卒業して、別の職業に就こうと思っていたんですけど、父が体調を崩したことを聞いて、ご縁があって愛知県の「株式会社かとう」で研修をさせていただきました。今年戻ってきたばかりなので経験はわずかでしたが、仙台に戻り、愛知にも増して家族葬化が進んでいると感じた一方で、愛知では100%会館葬儀ですが、仙台ではお寺だったり自宅だったりということが少ないながらもまだあるのかな、などという驚きもありました。

菅原:ありがとうございます。一通り皆さん方からいろんな意見が出ました。共通点もありますけれども、その中で葬儀あるいは葬祭業を経営していく上で考えている方向性、もしくはそれぞれに予見している事があればお話し下さい。

渡辺:やはり「家族葬」というキーワードは強烈だと感じます。しかし、結局はこの言葉に、一般の方々が葬儀に求めている事が凝縮されていると思われれます。葬祭業においても近い将来、少子化に伴う人口変化の流れで、大変な状況になったとしてもおかしくありません。極端なことを言えば、このまま葬儀社として頑張っていくべきなのか、それともほかの事業にも将来を見越して着手するのか、果たしてそれができるのかというところで今揺れているところでもあります。

菅原:今、渡辺さんから、究極的に言えば、葬祭業から業態変更をして生き残りを考える事もあり得るという痛烈なメッセージがありましたが、本当に考えさせられます。旧来の名称になりつつありますが、「葬儀屋」という呼び方でくくれば、いわゆる個人経営の商売を指すことが多いのではないかと思います。現代社会においてはコンビニやスーパーなどに取って代わり、「〇〇屋」という業態が成立しづらい社会環境にあるのかもしれない。

一方で2020年の宮城県の死亡者数は24,751人で、仙台市では9,200人ですから、葬儀の対象人数はしばらくの間、増加はしていくものの、一気に倍増するわけではありません。

亡くなる方がいる限り、葬儀の仕事自体はなくなるのかもしれませんが、葬儀を生業とする我々のほうが大きく変化していくのかもしれない。将来の葬祭業ということでは、日下さん、どんなイメージをお持ちでしょうか。

「葬祭業のこれからの展望について」



日下：前提にあるのは生活様式の変化と人口動態です。現在、団塊の世代が後期高齢者にさしかかり、その方々が死亡年齢に達した際に、グロスで考えれば当面のピークを迎えるのだと思います。その後、長期的には徐々に死亡者は減少していくわけですから、そうした社会環境へ順応しなければなりません。環境が変われば、意識も変化していくでしょうから、葬儀社としては新たな価値を創出して、はっきり言えば、それを費用に換算できるようにしていかなければならないと思います。いずれにしても、葬儀業界としては大きな変革を求められる時代が到来するでしょう。

菅原：価値観、というのは重要なキーワードになります。死は誰もが迎えますが、葬儀や、その後の埋葬など、価値観の変化の中で如何にして仕事をしていくかという事です。吉田さんいかがですか、これからの未来に向かっての葬祭業。

吉田：正直言って分かりません。ただ、私自身の考え方のひとつとして、最悪な状況になったらどうするか、というところから考える、という習慣があります。突き詰めて言うと、皆さんが言うように宗教的な意味が最も重要な事なのかどうか、お客様がどれだけ必要としているのかと疑問に思うときもあります。仏壇やお墓、という形にこだわらず、供養の気持ちがある限りは、私たちの仕事の必要性は無くならないと思います。

菅原：葬儀の場面に限らず、宗教の教えを伝えるということに費やすエネルギーが少ない気もします。しかし、葬儀全般では、宗教的な儀式に則って進められることも多いので、好むと好まざると葬儀社がそうしたサポートを担う必要があるかもしれません。高橋さん、如何ですか？

高橋：宗教者に対しては私たちの方から何かメッセージを発するつもりは無く、檀家さんが中心になって考えてもらえれば良いのかもしれません。ただ、我々としての経験値を基にした命や弔いの大切さみたいなことは伝えていきたいと考えています。そこから、葬儀の意味や必要性というのも伝えることになると思います。

菅原：社会環境や情勢が変わっていく中で、今高橋さんが言った「命の大切さ」はとても重要だろうと思います。そして仕事に真剣に向き合っているということが大切で、作業ではなく、仕事と捉えて会社全体を運営していかなければならないでしょうね。刈谷さん、如何ですか？

刈谷：先日、お客様から「遺族が誰も行けないから火葬だけしておいて欲しい」という要望がありました。ご遺族は東京に住んでいて、電話でやり取りをしながら手続きを整えて火葬をしたのですが、時代を感じましたね。今後の葬儀が縮小していくのはどうにも出来ませんが、我々が頼れる存在であり続ける事が、存在意義を維持していくための要素ではないかと思います。

菅原：私を始め、ここにいる皆さんが関わった時代だけでも相当変化しています。例えばここに日下前理事長がいたとしたら、更に以前からの話をお聞かせ下さるでしょうし、もちろん更に前の時代もあったわけです。そして時代は流れ、刈谷さんからお話し頂いたように「誰も立ち会わない火葬」をコーディネートするなどという事が現実的に起きているわけです。



これまでの常識で言うと、火葬の全てを葬儀社に任せてしまうということは中々考えられなかった。更に言えば、例えば遺骨をゆうパックで送って欲しい、などと言うこともあり得ます。我々のもつ倫理観では、遺骨を郵送するという行為がどうしてもなじめなくて、お金を頂けるかどうかはともかく、まずは社員が東京だろうが大阪だろうが抱えてお渡ししに行くこともありました。しかし、依

頼者からしてみたらそんなことは求めておらず、かえって迷惑だと思われる可能性すらあります。それが常識になると言うことではなくて、多様性の中で、選択肢としてはあり得る、存在する社会になっているのが現実です。

飯坂：多様性というところでありますけれども、皆さんの話をお聞きして思ったのですが、宗教者がおこなうことまで我々が踏み込んでいくべきなのかどうかとも思います。葬儀をビジネスとして考え

「葬祭業のこれからの展望について」

たときに、火葬と埋葬に関しては、行政でも出来なくはないと思います。そうすると、我々が特化すべきはアフターフォローの部分だと思います。今は料金を発生させやすいのがセレモニー周辺のこと、しかしそのあたりが稼げなくなってしまったときにどうするかを考えなければなりません。もう一つ葬儀までのことに関して言えば、エンバーミングがあります。このサービスは日程に縛られたりせずに、葬儀社としてももう少し遺族寄りに提案ができる可能性があると思います。お別れをきちんとさせたい、大事にしたいと言ったときに、エンバーミングという選択肢が一般的になれば、今は家族葬という、ある意味クローズされてしまっているお別れの場がもう少し意味のある形で演出できるのではないかと期待しております。

菅原：アフターサービスの部分を役務として成立させるのが重要だというのは大賛成です。お客様にとっても死後の手続きは限られた時間でおこなわなければならない、負担が大きいので、適正な価格でサポートすることは双方にメリットがあります。あとはエンバーミングに関してですが、現状、仙台でのエンバーミング



は納棺業者さんが運営している施設があります。ここを大手互助会さんが送客をしているようです。

当社でもエンバーミング事業を計画していますので、色々な発想に結びつけることが可能になってきます。1日葬のように、今は通夜を省略するという簡素化の方法として普及されていますが、視点を変えて、もっと特定の日をピンポイントで葬儀日に設定してお別れの場を作ると考えたほうが前向きかもしれません。火葬に縛られずにおこなうことが可能になると、あとは何よりもご遺体の状態、特に顔が穏やかになるというのはグリーンケアの観点からも非常に大きな貢献です。エンバーミング施設というのは各社がそれぞれ運営するというのも負担が大きいので、地域の葬儀社もご要望に応じて使って頂ければ良いと考えています。差別化とか、独占化よりも、今は共存共栄の時代でしょう。それでは議題を各社の展望に戻しまして、石巻の太田さんは仙台の環境とは若干異なる地域で運営を

されておられますが、私の記憶ではその昔、石巻では石巻葬儀社さんがほぼ独占状態だったように思います。宮城県では仙台に次いで屈指の場所ですから、その後、様々な葬儀社が石巻に出店されているわけですが、如何でしょうか？

太田：そうですね、地域性の前に「多様化」についてお話させて頂くのですが、先日、弊社でブラジル人の方のご葬儀をキリスト教で施行致しました。ご家族は日本人でしたので、親族に仏式が多く神父さんにご相談して、焼香所を設けることにしました。神父様も非常に柔軟で、好意的に受け止めて下さいました。先日、私が担当したご葬儀では、お客様が会館での葬儀を希望されておりましたが、何年か前、別のご家族が亡くなられた時にはお寺でのご葬儀でしたので、同じ場所で同じようにしては如何でしょうかとお話をして、結局お寺でおこなうことになりました。葬列を作り、いわゆる昔ながらのご葬儀となったわけですが、年配の方からは、昔はこうだったね、懐かしいねとの声が聞かれ、若い世代の参列者にとっては戸惑いながらも新鮮な体験だったとお話しておられました。何より400年以上の歴史がある本堂で葬儀儀式を営むということは、会館葬ではどうしても得ることができない荘厳さがあって、大変厳かなひとときでした。



片平：若輩ものですが、皆さんがおっしゃっていた多様なお見送りへの対応は大切になってくると思います。無宗教葬にしても、お客様のご要望や取り巻く環境を正しく見極めてアドバイスできる存在でありたいです。例えば先日、カフェのオーナーをしている方が、焼香で発せられる煙の匂いに抵抗があったようで、これ、コーヒーで焼香というのはどうでしょうかねというお話があって、コーヒーで焼香を試してみたところ、思った以上に良い香りが立ちのぼって、好評でした。

菅原：今日は皆さん方からいろんな、変化はしているということと、多様性に対応していかなければならないということ、そして共通しているのが本質を重視しているという事だと思いました。

40周年記念事業 理事長と青年部によるディスカッション

「葬祭業のこれからの展望について」



高橋：私は常に社員のみんなに「葬儀社としての本質的な部分というものを見失わないでやっていこう」という話は常々しています。一生に一回しかないお葬式というのをしっかりあげることができたと言ってもらえる、そんなサービスを心掛けていきたいと思っています。

飯坂：菅原理事長が言われた通り、この組合と組合外の違いというのはやっぱり葬儀に対する皆さんの思いもそうですし、それは代々受け継いで来たものでもあるし、そういうのは分かっている会社の集まりだと思うのが皆さま、組合員だと思います。

菅原：そうすると組合自体の存在価値をしっかりと見直す必要もあるかもしれませんね。現在の組織は30年ほど前からの体制を踏襲している部分もあるので、今後、時代に合わせてどのようにしていくのかという議論をしていきましょう。

刈谷：やはり我々は組合として方向性を同じくしていくのが良いことだと思います。何より怖いのは、葬儀をするという習慣がなくなってしまう事です。遺族が主体で行う葬儀ですから、我々は黒子として葬儀の価値を伝えていきたいと思っています。

片平：私も諸先輩方の話を聞いて本当に有意義でした。葬儀の考え方とか、現状の問題提起、今後どうしていくのかなどを考えることができましたので、モチベーションになりますし、ありがたいお話を聞けて良かったです。



吉田：時代の流れや世間の流行などはあるでしょうけど、それに乗っかれば良いという事でもないと思います。それは例えば情報収集や関係性づくりなどで、今日の集まりにしてもこうやって多くの会社の方々が集まって、意見を交わしているわけです。デジタルやAIが台頭してはいますが、繋がりや絆づくりというのを大切に、結局、葬儀というのも絆があってこそ成立する営みですから、人

と人との繋がりが大事だと思える社会にしていきたい
と思います。

日下：時代が変わっても本質的な部分は変わっていない
と思っています。人は2度死ぬ、という考え方があって、
最初はいわゆる生命の停止、もう一つはその方の思い出
や存在が、全ての生きている人の記憶から消えてしまう
時だと言われています。ですから、葬儀の大事な機能の
ひとつに、記憶に刻みつけると言いますか、非常に重要
な機会を作るということがあるんです。



菅原：皆さんから貴重な意見をいただきました。コーヒー豆で焼香って面白いと思いましたね。カフェ
を運営していたりという事に限らず、コーヒー好きな方であれば、そういう工夫があってもいいので
はないかと思えますし、そうした事例の紹介による情報交換は素晴らしい。

選んでいるのはお客様です。我々は競争ではなく共存です。私でも36年間の事業経験があつて、
日下さんのところや高橋さん、飯坂さんの会社はもっと長い歴史があり、それでも共存し、事業継承
を行なってきたのです。それから供養、ということ。我々が葬祭業に従事しているから、特に仏壇を
祀ったり手を合わせたりということは大切にします。そうした心構えというか習慣を、関わる一般の
方にも伝えていく必
要もあります。

日々、仕事の事を考
えている皆さんです
から、この場で全て
語り尽くすのは到底
無理ですが、皆さん
で商売を盛り立て
て、さらにその職業
が存在する意義も高
めていきたいと思
います。それぞれの会



「葬祭業のこれからの展望について」

社が地域に必要な存在でしょうから、例えば会館での葬儀利用が重なってしまい、本来自社にお願いして頂けるはずだったお客様が別の会社でやるとなっても、双方が連携をすることで、今回は日程の関係上やむを得ずこちらの会館を使うことになったけど、最初に頼まれた会社の供花をそっと供えておくなどして、関係性を切り離さないようにするというのも、共存していく工夫のひとつだと言えます。こうした気持ちは我々、宮城県葬祭業協同組合が連携していくための必要なことであって、県外から入ってきたり、あるいは何か投資目的にやっているような会社さんに私たちの地域の大切なお客様が流れてしまったりするのは残念なことです。我々は本質を大切にしながらそれぞれが質の高い事業を継続していくことができれば何よりで、その為の組合でもありますから、組合としても、個々の絆と団体としての取り組みの両輪で今後も継続していければと思います。

今日は本当に皆さんどうもありがとうございました。

